

保育の場における気になる子の家庭支援 — 一家庭と保育園との連携による映像を用いた食事場面への介入 —

藤 後 悦 子 ・ 野 澤 純 子 ・ 石 田 祥 代

Support for Families of Children with Special Needs at the Nursery through cooperation
between home and the Nursery School

- Intervention in the Dining Scene by Analyzing the recorded Video -

Togo Etsuko, Junko Nozawa, Sachiyo Ishida

要 旨

発達に課題のある「気になる子」は、生活習慣の確立が難しく親は「困り感」を抱いている。そこで本研究は、「気になる子」への家庭支援として、保育園で行われている生活動作スキル形成を家庭での子育てで生かすよう映像を用いた面接を実施することとした。面接では、「気になる子」の家庭での食事場面と保育園での食事場面の映像を比較しながら、母親自身の気づきを促し、母親自身で目標設定を行うこととした。その結果、家庭での食事場面での子どもの自発性の増加、大人の介助の減少、および大人との相互作用の増加が示された。本研究を通して、保育園での保育者のかかわり方を家庭に取り入れることで、子どもの適切な生活習慣が形成される可能性が示された。

キーワード：気になる子、家庭支援、映像、ロールモデル

問題と目的

発達に課題のある「気になる子」は、生活習慣の確立が難しく、親は「困り感」を抱いていることが先行研究より明らかになっている（石田・野澤・藤後, 2015；野澤・藤後, 2013；野澤・藤後・石田, 2014；藤後・野澤・石田, 2014）。その「困難さ」は年齢が高まるにつれて、減少するものではないため（稲嶺・三浦, 2004）、早期からの積極的な子育て支援が求められる。子育て支援の担い手としては、子育て支援センターや保健センター、各種NPO団体、保育の場などがあるが、その中でも多くの子ども達が関わる保育園や幼稚園は子育て支援の中核をなす。特に少子化社会対策基本法（平成15年）第11

条により、「保育所、幼稚園その他の保育サービスを提供する施設」については、子育て支援を担う責任があることが明文化され、名実ともに期待が高まることとなった。

日中多くの時間を過ごす保育園では、子どもは日々「食事・排泄・更衣・片づけ・お昼寝」を繰り返しており（石田・野澤・藤後, 2015）、これらの生活動作スキルは、生活習慣の基礎をなす身辺自立の確立へ直結している。本稿では、この生活動作スキルを「食事・排泄・更衣・片づけなどにかかわる動作」と定義する。身辺自立を支える生活動作スキル獲得の遅れには、感覚や想像力のアンバランスが関連し、さらには①両手がうまく使えない、②感覚の未発達、③力のコントロールが苦手、④ものをみる力が弱い、

⑤身体イメージがとらえにくいという要因も関連する(鴨下, 2013)。身辺自立を支える生活動作は、単に個々のスキルができるようになることのみでなく、自尊心の形成や学習の基礎能力を高めることにも関連する(鴨下, 2013)。例えば、食事動作は、感覚や手の発達を促し、スプーンや箸の手の使い方は鉛筆を持つ手首の使い方につながる。更衣動作としての洋服を着る、たたんでしまうという動作は体のイメージや空間認知や視知覚を高め数学的な思考の基礎となる。言い換えるならば、身辺自立が形成されないことは、今後の学習面の遅れにも関連する可能性が高いのである。

一方で、生活動作スキルは、日々の生活の中で毎日機会が保証されているために、この機会を上手に活用することが可能となる。生活の中での日々の積み重ねは、近年「埋め込まれた学習機会」として注目されており、通常の保育活動や家庭生活の中には多くの学習機会が埋め込まれている(金・園山, 2010)。しかし、核家族での子育てでは、子育ての方法をモデルとして学ぶ機会も少なく、どのように生活動作スキルを形成させるか、親自身戸惑いながら子育てを行っているのである(藤後・野澤・石田, 2014)。

そこで、保育の場での「埋め込まれた学習機会」で得た子どもの生活動作スキルが、家庭で般化されることで、親は子どもにより関わりやすくなるのではないかと考えた。言い換えれば、保育主体の生活動作スキルの獲得が子育ての「困り感」を抱える親の家庭支援につながるのである。つまり従来は、家庭主体に子どもの生活習慣を身につけさせていたが、現在では生後数か月から保育園に通う子どもが多いという近年の子育て傾向を受け、保育者の役割の重要性が増しているのである(松田, 2011)。

保育の場による子育て支援の内容は、「保育所における家族援助の実態に関する研究」(田中・米山・安部・大久保・長島, 2009)によると、家族援助についての相談・助言を約9割の保育園で実施しており、相談内容は「発育・発達」「しつけ」「基本的生活習慣」についてのことが多い。しかし保護者から

相談を受け保育者や園長が子どもへの関わり方を助言したとしても、そのことがきちんと理解され、家庭で実行できているかどうかは疑問である。例えば、保育者が子どもの着替える様子を「叱らず見守ってください」と助言した場合、「1分」見守る親もいれば、「10分」見守る親もいるであろう。さらに近年の子育てでは、親中心の生活や子どもの多忙なスケジュールのため親子ともに時間に追われてしまい、親が必要以上に子どもの作業を手伝ってしまうなどの問題がある。生活動作スキル形成の前提として、子どもの主体性を重視したかかわりが求められ、それを可能とするような大人のかかわりが大切となる。

ロールモデルとして実際の保育者との接し方を見て学ぶことができる保育の場とは、子育て支援において貴重な機会提供ができる場となるであろう。しかしながら子育てには正解がないために、保育者の助言を自分流に解釈してしまうこともありえる。

このように保育の場の実践と家庭のしつけのギャップを埋めるためには、具体的な関わり方の気づきを促すような映像を用いた支援が有効ではないかと考えた。つまり、保育の場での保育者の対応と、自宅での子どもの対応の様子を映像として比較することで、親自身の気づきを促し、子どもの生活動作スキル形成を促すような適切な対応が可能になるのではないかと考えた。

以上より本研究は、「気になる子」への家庭支援として、母親の気づきを促し、母親自身で子どもへの関わり方の行動変容が可能になるような支援内容を検討することとした。その方法として保育と日常の同じ場面を映像で比較しながら面接を実施することとした。

方法

1. 対象幼児の概要

関東地方の民間保育園に在園している幼児1名(以下、本児とする)を本研究の対象とした。本児は4歳の男児で、脳性まひによる体幹機能障害、中度の知的障害による愛の手帳3度を取得している。家族構成は、母親(20代)、祖父母、おばと同居で

ある。本児が4歳児であった20XXから母親面接を開始した。母親の本児への子育て意欲は高く、母親本人から保育園の生活を参考にし、本児への関わり方を学びたいとの申し出があった。日常では祖母が保育園のお迎えを担当するなど、家族全体で本児の子育てに積極的にかかわっている。

2. 倫理的配慮

本研究に先立ち支援チームメンバーの大学教員が所属する機関で本支援を含む保育園での家庭支援に関する研究を倫理委員会にて承認を得た。また保育園および母親に対して、研究の目的、参加の自由、研究成果の公表、個人情報保護について書面及び口頭で説明し、同意を得た。

3. 支援チーム

支援者は、担任の保育者2名（男性20代、女性30代）、保育園に勤務する非常勤カウンセラー（筆者、女性40代）、大学教員1名（女性40代）、母親であった。20代男性のクラス担任は年長担当が初めてであった。30代女性のクラス担任は1歳児からの持ち上がりであり、子どもの中には5年間担当してもらった子どももいた。筆者は臨床心理士と臨床発達心理士を有し、本園が開園した年から勤務しており、現在15年目である。本園では保護者対象のカウンセリングや発達相談、子どもの行動観察などの発達支援を担当している。本研究の支援内容は、保育中での行動観察、個別相談、映像を活用した家庭支援を実施した。母親の主訴が身辺自立の食事場面に関するものであったために、主に食事場面に焦点をあてて、大人の関わりと本児の行動変容を目的とした。

4. 期間

研究期間は20XX年8月から20XX+1年8月であった。

5. 支援開始時のアセスメント

1) 発達検査の結果

支援開始時（4歳7か月）のKIDS乳幼児発達スケールでは、運動39か月、操作36か月、理解39か月、表出言語39か月、概念39か月、対子ども社会性36か月、対成人社会性39か月、しつけ39か月であった。また新版K式発達検査2001の結果は、姿勢・運動

(P-M) 発達指数51、認知・適応 (C-A) 発達指数42、言語・社会 (L-S) 発達指数55、全領域発達指数49であった。課題時の様子では、集中力が短めで、本児にとって少し難しいと感じる問題が提示されると、自分の話を始めたり、笑ってごまかしたりと課題そのものに取り組むことをやめてしまう様子が示された。しかし「これはどうかな?」「続きやってみて」などと声をかけて促すと、再度課題に取り組むことができた。また、新しい課題については、一度で手順を理解することは難しいようだが、何度か繰り返すうちに手順を覚えることができた。

2) 母親の面接結果

生活面に関して自宅での様子を確認すると、「睡眠は良好」、「食事は一人では食べられない、排泄はおむつを利用、うんちをした後にうんちと教える」、「衣服の着脱は、保育園ではズボンを脱いだり、家ではTシャツのそでの中に手を入れることができる」、「移動は徒歩中心で、興味があるものに向かって急に走っていってしまう」などの様子が示された。また、「コミュニケーションは言葉がでてきたので、家族の者は本人の言っていることがわかるようになった。しかし、他の人に気持ちを伝えることはまだ難しい」とのことであった。「好きなことは、電車や車に乗っての外出であり、苦手なことは物事の終わりや停止が難しい」と語られた。母親の願いとしては、「生活面では、自分の意志を伝える、一人でご飯を食べる、おしっこ・うんちを教えることができるようになること。人との関わりでは、気に入らないことがあった時、人をたたくことをやめること」であった。一年後に達成してほしいことは、「一人でご飯を食べること」と記載していた。

6. 標的行動

本研究の標的行動を選定する際、母親に現在困っていることの中で優先順位をつけるよう尋ねたところ、「一人でご飯を食べること」であったため、食事場面に焦点をあてることとした。自宅での食事の様子を確認したところ、ほぼ大人が食べさせることが多いとのことであったので、自発的にご飯を食べることを標的行動とした。さらに、食事中、コミュニケー

ションをとりながらご飯を食べたいとのことも述べられたので、大人との相互作用も標的行動とすることとした。以上のことから、標的行動は、家庭での食事場面での本児の自発的行動（標的行動A）の増加と大人のプロンプト（標的行動B）の低下と家族と本児の相互作用（標的行動C）の増加とした。

標的行動Aに関しては、「自分から食べようとする、自分でお代わりをしようとする、自分から片づけようとする」など、食事に関する生活動作を本児から生起した場合にカウントした。次に標的行動Bの大人のプロンプトであるが、本児の食事に関する生活動作を「大人が本児の手をとって促す、大人が本児の体にさわるなど合図をして促す、大人が言葉で促す、大人が視線で促す」など大人が本児に働きかけるすべての行動をプロンプトとしてカウントした。標的行動Cに関しては、本児→家族、家族→本児と1ターン以上生起した場合にはすべてカウントした。2ターン以上連続で生起したとしてもカウントは1回とした。

7. 手続き

本研究は、ベースライン期と介入期からなるABデザインを用いた。ベースラインの手続きとしては、月に2回程度、母親と筆者との個人面接（1時間）

を保育園で実施した。その際、母親が家庭での本児の食事場面の様子をビデオに撮影しそのビデオを筆者と母親と一緒に見ながら、母親にビデオを通して気づいたことを記載するよう求めた。記載内容は、①子どもの様子で気づいた点、②大人の対応について気づいた点、③次回の目標という3点であった。次回の目標に関しては、母親自身に決定してもらうこととした。筆者は、母親の気づきに対して「よく見えていますね」など共感的な対応を行い、母親が決定した関わりに対しては、否定せずに「ぜひ次回までに試してみてください」とのみ伝えた。

8. 介入方法

介入期では、保育園での本児の食事場面の様子を筆者がビデオで撮影し、母親面接の際、母親が撮影してきた自宅での食事場面のビデオと保育園での食事場面でのビデオを見比べて、母親自身が気づいたこと（子どもの様子、大人の対応の仕方）を紙に記載し、両者のビデオの視聴を踏まえて、次回までの目標を設定していった。

撮影したビデオに関して、家庭での食事場面3分間を分析対象とし、ビデオ開始15秒後からカウントした。2名の者で10秒ごとのタイムサンプリングを実施し、合意により内容を確認した。

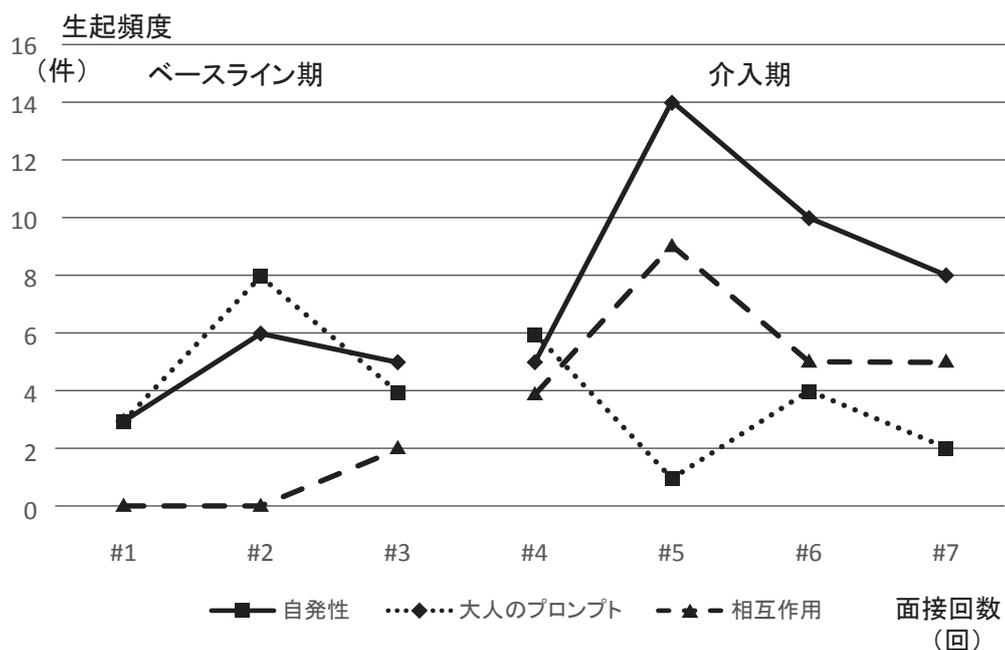


図1 標的行動の生起頻度

結果

面接は、ベースライン期3回、介入期4回であった。ただし、介入期の4回目は家庭と保育園での食事場面を見て気づいた点を確認し、次回までの目標

を設定したので、5回目からが介入内容の成果が示されていることとなる（図1）。面接時に母親が記載した内容は表1の通りである。

ベースライン期の面接で母親が気づいた点として記載した内容は、大人の対応や子どもの様子よりも、

表1 面接場面における母親の発言および記録内様

面接回数とその内容	# 1～3	# 4	# 5	# 6
	自宅での様子をビデオで確認	自宅での様子と保育園での様子を比較して次回目標を決める。	自宅での様子と保育園での様子を比較して次回目標を決める。	自宅での様子と保育園での様子を比較して次回目標を決める。
子どもの様子で気づいた点	<p>#1 家ではiPadとTVを見ながら食べている。</p> <p>#2 座っていることができなかったが、今では「しゃべる」ことに集中しているので、座ることができている。</p> <p>#3 iPadは以前よりやる機会が少なくなった。最近はレールのおもちゃ、キッチンからおたま、スプーンで遊んだり、他のことに興味が行くようになった。</p> <p>s真似することの楽しさがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・以前に比べ座っている時間が増えた。 ・お皿の持ち方が両手で上手になった。 ・スプーンの選び方が気になった。 ・以前と比べ、手づかみも指先を使って食べるようになった。 ・周囲に気がとられている。 ・会話が増えると、ふざけることも増える。 ・時間をかけて食べられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間をかけて食事をする機会を増やしていきたい。 ・表情がお家と保育園では全く違う。 ・食事をこぼす機会が減っている。 ・保育園の方が食べる環境になっている様子。 ・スプーン、フォークを使う機会が少ない。 ・友達との会話、家族との会話が4月に比べて増えた。 ・細かい動作（食器を運ぶ、茶碗を持つ、トングを使う）等、上手になってきた。 ・自然と席に戻れるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食事に集中して、ごはんをこぼさずお皿をもって食べる。 ・食べ物（納豆）をお皿に移すことができている。 ・手づかみが減った。 ・お皿をおさえて食べる。 ・会話のはっきりしてきた。 ・顔つきがしっかりしてきた。
大人の対応について気づいた点		<ul style="list-style-type: none"> ・大人が一对一で向き合っている。 ・本人のペースで食事をする。 ・一緒に食べている。 ・保育園だと介助する回数が少なく、本人のペースで食べさせている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・介助が減った。
次回までに工夫したい内容	<p>#1 食事の場面の大切さを意識していきたい。</p> <p>#2 iPadの時間を少し減らしたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に食べる時間を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食事の場面で、スプーン、フォークを使用する機会を増やす。 ・現在よりももう少し、食事前後の時間をとり、食事環境を整える。 ・本人一人で食べるように手伝わない。 ・片づけを最後までやらせる。 ・たくさんお話する機会を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食事前に他のことに集中していると、食事の移行が難しい。一緒におもちゃを片づけ、ご飯を食べる。意識がいくように声をかける。

環境設定についての内容が多かった。特に最初のビデオの様子では、本児はテレビを見ながら、かつ手元にiPadを置いて、iPadを操作しながらごはんを食べている様子が見られた。iPadがあると椅子に座って食べることができるとのことで、iPadを活用しているとのことであった。自宅の様子を映像で確認すると、母親自身何点か気になったようで、「テレビがあると食べないですね」「iPadを見たがるんですね」などと発言した。その後の面接では、本児がおもちゃで遊びながら食べている様子が見られたので、その点について母親は「おもちゃを持っているとフォークなどが使いにくいですね」などの発言を示した。ベースライン期における標的行動の自発的行動、大人のプロンプト、相互作用の生起数は、自発的行動と大人のプロンプト数が平均してほぼ同数であった。つまり、大人が言葉や動作で本児の食事行動を促した時に、初めて食事行動が生起するということが繰り返されていた。この時期の食事環境としては、母親の指摘通りTVがついていたり、手元にiPadがあったり、さらにはおもちゃを手を持っていたりなどの様子が観察され、本児は食事に集中できておらず、食事への注目をひくような母親や祖父母による声掛け、動作のプロンプトとして、とんとんと身体をたたいて合図をして食事を口元にまで運んであげるといったような行動が目立っていた。

介入が開始された#4回目の面接では、初めて自宅と保育場面の食事の様子を比較することとなった。母親の感想としては、「自宅では、介助することが多く、一緒に食べるということが少なかった。外食に行っても必ず本児を先に食べさせて、そのあと私たちが食べるというように時間をずらして注文していた。保育園だと、介助する回数が少なく、本人のペースで食べさせている。意外と自分一人で食べられるんだと思った。会話をしながら本人のペースで食べてほしいと思う。保育園はゆっくりとのんびり食べている。かんだりするのも落ち着いて口を閉じて食べている。親だと骨などはすぐにほぐしてしまう」というように、家庭での大人の対応と保育者との対応を比較しながら気づいたことを挙げていた。

また本児の様子としては、「食器も自分で片づけている」と驚きを示しており、「保育園での食事の前後にも興味がある。食具の使い方にも興味がある」と食事の準備や片づけの促し方に興味を持った様子であった。#4回の面接後、次回までの目標としては「食事の場面で、スプーン、フォークを使用する機会を増やす。現在よりももう少し食事前後の時間をとり、食事環境を整える。本人一人で食べるように手伝われない。片づけを最後までやらせる。たくさんお話する機会を持つ」ということが書かれていた。

介入期である#4回目以降の本児の家庭での食事場面では、TVやiPadの使用を控え食事環境を整えていた。また大人によるプロンプトは実施するものの、食事への促しを行った後、本児の自発性に対して「おいしいね」などと共感的なフィードバックを行うことが増えていた。その結果、本児の自発的行動及び大人との相互作用の生起頻度も高まっていた。今までは大人主導の食事場面という印象であったが、#5からは本児主体の食事場面に変化し、また食事を本児とともにまわりの大人も一緒に楽しむという雰囲気を作られていった。食具の使用の仕方も変化しており、お皿を持って食べたり、こぼすことが減ったりというような成長が見られた。

本児の5歳4か月時点でのKIDSの結果は、運動36か月、操作48か月、理解言語42か月、表出言語45か月、概念39か月、対子ども社会性39か月、対成人社会性45か月、しつけ45か月であり、操作、表出言語、しつけの部分で伸びが見られた。

考察

1. 介入効果の検討

本研究の対象になった母親は、問題意識が高く、保育園での子どもへの関わりを家庭でも取り入れようとして自分なりに工夫していた。保育者主体の家庭支援としては、保育者が子どもへの関わりを具体的に教示する方法、モデルを示す方法などがあるが、日々の保育の中から親自身が保育者をロールモデルとして関わり方を学ぶことも有効であると考えた。そこで、本研究では介入方法として、自宅と保育で

の本児の食事場面を比較して、母親自身の気づきをもとに、関わりの目標を設定し、母親および子どもの変容を促す試みを行った。

ベースライン期では、母親は保育の食事場면을意識しているといいつつも、過度なプロンプトや食事環境の不整備などが目立ち、本児の食事への自発的行動の生起は低かった。しかしながら、保育と家庭での食事場面の映像比較を通して、母親自身で食事環境の不適切さや過度の関わり方に気づいて、自ら関わりを訂正していくことが可能となった。介入後の5回目以降、大人のプロンプトの低下と本児の自発性が増加し、家庭での食事場面への困り感が減少した。

2. 保育園と家庭との連携に向けて

子育てにおいて子どもの生活習慣や身辺自立に困り感を抱いている親は多く、特に「気になる子」の親は定型発達の子どものみと比べると、より子育ての困難さを抱えている（野澤・藤後, 2013; 野澤・藤後・石田, 2014; 藤後・野澤・石田, 2014）。しかしながら、「気になる子」の親は、援助を求めているにも関わらず、援助要請を行わない傾向があり、保育者からの何らかのアプローチが求められる（藤後・野澤・石田, 2015）。特に食事場面、睡眠場面、着衣場面は毎日のことであるがゆえに、子育てでの困り感が高い。しかし保育園での朝夕の送迎場面では、食事、睡眠、着衣場面に遭遇することは少なく、どのような大人の対応がよいのかを体験的に学ぶことができにくい。またこれらの生活動作を垣間見られる保育体験なども貴重な機会であるが、親が保育に参加するということは、非日常的な行為であるため、嬉しくて子どもは親に過度に甘えたり依存的になったりと、通常の保育中の子どもの様子とは異なることも多い。

一方で、保育者が保護者に言葉で関わり方を伝えたり、園便りなどで子育て情報を伝えても、現在の親世代は体験知そのものが少ないために、聴覚的情報や文字情報のみでは適切な行動が形成しにくい。また保育者から保護者への支援方法も現在の傾向としては、指導よりも横の関係においてのコミュニケーションが求められるとの指摘がある。そこで、本研

究では、あくまでも保育園側は日常の保育の場面の情報提供のみを行い、母親自身で問題に気づき対応方法を考えるという方法を検討し、その効果を確認できた。特別ニーズ児には、日常の保育の延長で対応し効果を示した（小笠原・前田, 2009）という報告からも、日常の保育の情報を提供し、それらをもとに母親が自身の子育ての内省が可能となり、具体的な行動変容につながったということは評価に値する。

以上より、今後の保育者主体の家庭支援の方法として、映像を用い、親自身の気づきを促す方法の有効性が示唆された。これを保育の場で活用する場合、例えば、日常の食事場면을ビデオで撮影し、保護者会の際その映像を見ながら、大人の関わりや子どもの様子を問いかけるようなファシリテートを保育者が行うことで親の気づきを促すこともできるであろう。映像は個人情報が含まれるため、その管理や同意の取り方は徹底するにしろ、保護者会や個人面談での活用は有効ではないかと考えられ、今後の検討が期待される。

引用文献

- 稲嶺裕子・三浦剛（2004）. 発達障害児をもつ母親の主観的疲労感の変化：福祉的介入の効果を探る. 保健福祉学研究, 2, 45-54.
- 石田祥代・野澤純子・藤後悦子（2015）. 気になる子どものしつけに関する研究の動向と課題：「家庭教育・しつけ」要因検討のための知見と情報を得るために. 東京成徳大学紀要一人文学部・応用心理学部一, 22, 35-48.
- 鴨下賢一（2013）. 発達が気になる子への生活動作の教え方. 中央法規
- 金珍熙・園山繁樹（2010）. 統合保育場面における「埋め込まれた学習機会の活用」を用いた外部支援者による支援の検討. 特殊教育学研究, 48(4), 285-297.
- 松田純子（2011）. 幼児の生活をつくる—幼児期の「しつけ」と保育者の役割—. 実践女子大学 生活科学部紀要, 48, 95-10.
- 野澤純子・藤後悦子（2013）. 保育における気になる子どもの家庭支援の動向と課題—身辺自立に関する「困り感」に焦点をあてて—. 立教女学院短期大学幼児教

- 育研究所紀要, 16, 21-30.
- 野澤純子・藤後悦子・石田祥代 (2014). 保育所の特性を踏まえた巡回相談方法の検討—基本的生活習慣の形成を重視する. 保育所の事例を通して—立教女学院短期大学紀要, 46, 85-93.
- 小笠原明子・前田泰弘 (2009). 野外保育による幼児の「育ち」の支援. 保育学研究, 47(2), 121-131.
- 田中利則・米山岳廣・阿部和子・大久保秀子・長島和代 (2009). 保育所における家族援助の実態に関する研究. 湘北紀要, 30, 21-38.
- 藤後悦子・野澤純子・石田祥代 (2014). 保育者主体の家庭支援における意義と課題—特別ニーズ児に焦点をあてて—. 未来の保育と教育—東京未来大学こども実習サポートセンター紀要, 1, 19-32.
- 藤後悦子・野澤純子・石田祥代 (2015). 気になる子のしつけの困り感から援助要請へのプロセス. 日本特殊教育学会第53回大会論文集, 7-9.
- (とうご えつこ) 東京未来大学
(のざわ じゅんこ) 東京家政大学
(いしだ さちよ) 東京成徳大学